

東西文明の比較 (11)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

縄文時代は平等社会だ、といわれてきました。確かに、このことは世界に類を見ない事象として誇るべきことだと思います。しかし、最近の研究では、階層といわれるほどではありませんが、統率者(リーダー)的な存在があったようだとされるようになりました。

例えば、大きな獣の群れや魚の大群を大がかりに、効率よく捕獲するためには、多人数による規律のとれた、組織的な行動を必要とします。そのためにはリーダーと役割分担が不可欠です。おそらく、経験豊富な長老がリーダーになっていたのではないのでしょうか。

狩猟や魚捕りなどにはそれぞれ、巧みな集団や人々がいて、多くの人々をリードしていたにちがひありません。

集落の設営という大事業も同様なことがいえそうです。土地の選定や造営、建物や濠・溝・柵などの建設、道の敷設など、大規模な土木工事を必要とする状況が確認されています。これらの工事には、計画を立案・設計し、役割分担を指示し、施工管理し、成果を評価・褒賞する役割を担う人がいなければ、大事業は成し遂げることは出来なかったでしょう。つまり、役割に応じて仕事を分担する多くの人々によって構成された階層社会や集団が形成されていたのです。三内丸山遺跡などでは、大型建物や環状配石墓に4.2メートルの規格的な柱の間隔や環状配石が設定されています。この事実は、遺跡の建設作業に設計図と縄文尺が存在し、それぞれ分担して作業をしていたことが想像されます。

ただし縄文時代の階層は、一般的に男女の別、年齢別の階層、生業ごとのグループ、出自によるグループなどの区分がほとんどで、「上下に固定した階層」ではなかったようです。

墓地・墓・副葬品から見た階層

「散骨」とか「公園墓地」という新しい形態の埋葬法がしばしば話題になります。これは、子や孫に迷惑をかけたくないという最近の傾向ではないでしょうか。では、縄文時代はどのような埋葬法だったのでしょうか。

墓地は「現世における集団内での関係(地位など)を、死後の世界に反映させるもの」だったと考えられます。墓の構造や大きさ、副葬品は、死者の生前における集団内での地位や役割などを示しているのです。三内丸山遺跡の例を挙げてみましょう。

1. 集落の北と南の出入り口に道の両側に沿ってならぶ墓群
2. 集落西部の奥まった丘の傾斜面にまとまって営まれた土坑墓群
3. 南西の道に沿った丘の斜面に一列に並ぶ環状配石墓
4. 集落内にまとまって点在する乳幼児甕棺(埋葬土器)

なぜ、4タイプの墓が存在したのか、そこには何か区別する理由があったと考えられます。

注目するのは、3の環状配石墓です。長軸2メートルほどで、幅のある大きな墓穴とその上に4.2メートルの規格的な環状配石がのせられています。三内丸山遺跡では縄文中期の後半(約4000～4500年前)、周辺の集落を統合して、大規模の集落になりました。そこで集落をまとめるために、大きな権力を持ったリーダーが誕生し、環状配石墓はそれらのリーダーのものであることが確認されています。

また、東北地方南部、岩手県西田遺跡では、縄文中期の環状集落の中央広場に墓地が環状に営まれています。そのほか、関東や中部地方でも環状集落の中央広場の墓地の一角から、そこにだけ玉類・耳飾りなどが副葬された墓が多く発掘されています。いずれもムラのリーダーたちの墓であり、それらのリーダーは世襲されていたと考えられます。

縄文絵画や土偶にシャーマン

縄文人は絵を描いたり、具体的な像を表現するこ

とは余りありません。縄文人の最初の絵は愛媛県上黒岩の岩陰遺跡から発見されました。数センチの扁平礫に刻まれた線画です。土器や土偶に表現された人物は、いずれもシャーマンなどの特別な人物であったと思われます。

貧富の格差をつける階層はなかった

縄文社会の階層化について、狩猟や土木工事などの面と、墓や墓地、絵画などから考察してきました。その結果としていえることは、縄文社会においては極端に突出した階層はなかったということです。

先に挙げた作業で、経験や能力によるゆるやかな階層は存在し、代々世襲されたことはあったようですが、固定的な「上下関係」はありません。その理由をいくつか挙げてみます。

1. 集落内に、溝や堀などで区画して特別な場所を占有する住居などが無い。
2. 特別な構造や規模、家財道具や財産を置く建物がない。
3. 生業や各種作業には、役割分担があった。
4. 呪術を司る者(シャーマン)はいた。
5. 一人一墓の規格にほとんど差の無い墓があった。

縄文時代に争いはなかった…私見ですが

1万年以上続いた縄文時代は、極めて平穏な時代だったと言われます。このことは、世界でも注目されてきました。ではなぜか？

最近、縄文人のDNA鑑定から我々日本人のルーツがわかり始めました。まだ初期の段階のようですが、従来の考え方が変わるような出来事です。

その報告によれば、従来、旧石器時代人として存在が確認された人々は、「東アジア人^注」といい4万年前に住み着いていました。この人たちが縄文人のルーツだそうです。その後、1万3000年前頃から、新たに「北東アジア人」と「東南アジア人」が相次いで日本列島に移住してきたといえます。それらの人々が混ざり合って現在いわれている「縄文人」ということだそうです。このことが事実とすれば、先住の「東アジア人」、後続の「北東アジア人」と「東南アジア人」の出会いはどうなシーンだったか、想像す

るだけで身震いします。

自然界にある豊富な食糧の調達方法は、先住の「東アジア人」が教えたでしょう。見よう見まねで「北東アジア人」と「東南アジア人」が、それらを学び、安定した毎日を送ってきたのではないのでしょうか。

時代を下って弥生人が日本列島に来たときのことを考えれば、状況の違いが分ります。弥生人とはどういう人たちか。私が学んだ通りであれば、彼らは「争い」を知っていたということです。当時の大陸は「春秋・戦国」の時代でした。そこには「生きるため、豊かになるため」に、権謀術数の争いが日常茶飯事であったはずで、そうした争いから逃れて平和な日本へ逃れてきたともいえるのではないのでしょうか。

一部の説では、争いごとを知っている弥生人という渡来の人々は、争いを知らない縄文人という先住民を蹴散らして山奥に追いやり、平地に水田を作って稲を植えた、といえます。

しかし、最近その説は少数意見になったようです。その理由の第一に、そんなに大量の渡来人が一緒に来たという証拠がない。第二に、遺跡から縄文・弥生の土器などが一緒に発掘されていること。これは縄文人と弥生人が仲良く共同生活をしてきた証拠である、というものです。異なる種族が仲良く共同生活する伝統は、遠い昔から続いていたことは間違いありません。こうした日本の伝統をもっと「大きな声」で伝えてもいいのではないのでしょうか。

注) 個々に挙げた「東アジア人」「北東アジア人」「東南アジア人」は、概念的な名称です。イメージするために、下記を参考にしてください。

東アジア(人)：ユーラシア大陸の東部にあたるアジア地域を指す。北西からモンゴル高原・中国大陸・朝鮮半島・台湾・琉球諸島・日本列島を含む。地理的区分では、北は天山山脈、モンゴル高原、アムール川まで、南は雲貴高原、西はチベット高原ヒマラヤ山脈までをいう。

北東アジア(人)：この地域の中心はモンゴル。中国・東トルキスタン・チベット、旧満州などに居住した民。

東南アジア(人)：大陸部ではベトナム・マレーシア・タイ、フィリピン・インドネシアなどの諸島に住む民。2～3万年前の後期旧石器時代から、洞窟や岩陰に人間が生活した痕跡を見る。